コミュニケーション論再考 Ⅳ
――「本源的対話性」に根ざす人間コミュニケーション――

中 村 義 実

はじめに

「新学習指導要領」[1]が、2002年度より実施に移された。新指導要領に盛り込まれた「実践的コミュニケーション能力」という用語に焦点が当たり、新しい中学校英語教科書は「会話文」の分量が一層増え、内容も電話、買い物、道案内等の「使用場面」の具体的な設定が目立つようになったという[2]。

文部科学省は、2002年7月、その新指導要領を後押しするかのように、「『英語が使える日本人』の育成のための戦略構想－英語力・国語力増進プラン」[3]を発表した。「国民全体に求められる英語力」の達成目標がその冒頭に掲げられており、中学校卒業段階では、「挨拶や応対等の平易な会話（同程度の読む・書く・聞く）ができる」、高校卒業段階では「日常の話題に関する通常の会話（同程度の読む・書く・聞く）ができる」との基準が示されている。留意すべきことに、中学、高校いずれの基準も「会話」という言葉が真っ先に記され、他の三技能（「読む・書く・聞く」）は、「会話」にあたかも従属するような括弧づけの扱いを受けている。

「話す」ことにことさら関心が向けられる現象は、今日、学校のみならず、企業や一般社会を含めて日本全体に広がっている。大手の英会話学校の受講者数は、この5年で2倍に伸びたという[4]。また、書店では次々と英語に関する新刊が並び、最近は、タレントが書いた英会話の本がヒットするという現象が話題になっている[5]。

拙稿「コミュニケーション論再考」（以下「再考Ⅰ」、2000年）[6]において、私は「実践的コミュニケーション能力」について考察を試みた。その用語が、「話す」能力と同一視される傾向に疑問を投じ、人間同士が影響を与えあい、つながりを紡ぎあうための「人間の顔をした」コミュニケーション理論[7]に着目した。

日本全体をおおう英会話熱の現象を肌で感じながら、私は今日ほど、新しいコミュニケーション理論の構築が求められている時代はない、と感じている。「再考Ⅰ」の後、私は、「再考Ⅱ」（2001年）[8]と「再考Ⅲ」（2002年）[9]を書き進め、様々な識者の知見の認識と自らの授業実践の相

互作用を基に、コミュニケーションについて考察を続けた。

本稿では、人間コミュニケーションが持つ「マシン」と「ヒューマン」の二面の特性に眼差しを向け、言語教育一般における両者の適正なバランスについて考える。「本源的対話性」という概念を軸に、言葉を身体との関係で捉える浜田寿美男氏（花園大学教授）のコミュニケーション論を主題に据える。「本源的対話性」を視野に入れた教育の実践についても最終項で紹介する。

1）「紙飛行機」観に基づくコミュニケーション論

「再考Ⅰ」で、私は「コードモデル」としてのコミュニケーション論に言及した[10]。コードモデルとは、言語全体の体系を意味のコード表と捉え、言葉のやりとりをあらかじめコード表によって確定された意味、つまり「コード」の交換であるとする見方である。話し手の意図した言葉が、聞き手のもとに届き、聞き手の解釈した意味と話し手の意図した意味、つまり「コード」が一致する、というあり方をコミュニケーションの成立とみなす。相手に最も受けとめやすい「ことば」を投げ、相手から投げられた「ことば」をしっかりと受けとめることを理想とする、いわゆる「キャッチボール」観に基づくコミュニケーションモデルである。

このコミュニケーションモデルは、今日頻繁に耳目に触れる「言語はコミュニケーションの道具である」とする言語観（以下、「言語道具論」）と響きあうところが多い。「言語道具論」はコミュニケーションを「目的達成行為」として捉え、目的達成のために、いかに言語を効率的に、また効果的に運用するかに意識を傾ける。その結果として、コミュニケーションが「マシン・イメージ」で捉えられる色彩が強くなる。

言語に「マシン」としての特性が備わっていることは否定できない事実である。人間は日々、あらゆる目的達成行為に携わっている。例えば、電話でホテル宿泊の予約をしたり、レストランで食べたいものをオーダーしたり、あるいは、他人と会う約束を断ったりする際に、必要とされる語彙や知っておくと便利な言回しというものがある。それらの語彙や表現をいかに効果的に使うかによって、より効率的に目的が達成されるという現象は日々体験可能である。「言語道具論」は、人間コミュニケーションの一断面を確かに描写している。

しかしながら、コードの一致や、目的達成行為という視点のみから、人間コミュニケーションの全貌を説明できるかというと決してそうでは

ない。言語には、「マシン」としての特性のみならず、「ヒューマン」としての特性がある。どんなに語彙力があっても、またどんなに便利な言回しを知っていても、それらが機能を果たさない状況は数限りなく存在する。また、目的達成という意識を全く持たずに、言葉を発しあうコミュニケーションも存在する。

コミュニケーションの「ヒューマン」としての特性をより明らかにするために、2000年に日米両国首脳の間で交わされたとされる、一見、珍妙なる挨拶言葉のやりとりを紹介する。後日の報道によれば、そのやりとりが本当に起こったかどうかは、実際のところ明らかではないという(11)。本稿では、敢えて「起こり得た話」と仮定して、論を進める。仮に実話でなかろうとも、コミュニケーションの「ヒューマン・イメージ」を象徴的に示す格好の「小話」であると思われる。

そのやりとりは、2000年5月、ホワイトハウスにおいて開催された日米首脳会談の直前に起こったとされる。報道によれば、森氏は、クリントン氏への最初の挨拶を交わす中で、"I am Hillary's husband."というクリントン氏の言葉に対して、"Me, too."という頓珍漢な応答をしたという。そのニュースはマスコミに紹介され(12)、森氏は世間の失笑を買うことになった。その話題は、英語教育界にも及び、国弘正雄、村松増美という英語界の重鎮である両氏がともに、その時期の講演でこの話題を取り上げ、それぞれが興味深い解釈を施した(13)。

まず、国弘氏は、"Me, too."発言について、「森氏が言うに事欠いて放った失言である」と解釈し、森氏の品のなさを揶揄した。その一方で、クリントン氏の上品なユーモア感覚を賞賛した(14)。私は、国弘氏の解釈に幾分釈然とせぬものを感じた。"Me, too."と述べたとされる森氏の真意が明らかにされているとは思えなかったのである。その疑問は、その後日に村松氏による解釈を聞いてきれいに解けることになる。

村松氏は、その文脈を次のように解説した。森氏は、最初に "How are you?"という挨拶の常套句を発したつもりだった。しかしながら、森氏の発音ミスからか、クリントン氏には、それが"Who are you?"に聞こえた。"I am Hillary's husband."は、その「取り違え」の問いに対して、クリントン氏がひねり出した機知ある応答であろう。森氏は、当然ながら、その予期せぬ応答の意味を即座に解釈することはできなかった。型どおりの "I am fine."に類する応答を予期していた森氏は、訳が分からぬままに、再び常套句である"Me, too."という言葉を発するしかなかった。

村松氏の上の解釈が正しいものであるか否かは、当事者に直接問わない限り知ることはできない。しかしながら、村松氏の解釈は、森、クリントン両氏の間に繰り広げられたとされる会話のからくりを解き明かすに十分な説明と言ってよい。森氏が意図的にその言葉を発したという誤解はこれで解ける。よく考えれば、この種の言葉の行き違いは私たちの身近なコミュニケーションにおいてもしばしば発生することに気づく。たまたま、日米の両首脳の間で、しかも単なる挨拶言葉を交わす過程でそれが起こったとされるところに象徴的な意味がある。

森、クリントン両氏のやりとりは、「言語道具論」の観点からは、紛れもないミスコミュニケーションとみなされよう。両者のコミュニケーションは成立に至らなかった。また、それにとどまらず、森氏は面目を失い、クリントン氏は不快感を味わったかもしれない。両者のコミュニケーションは「失敗」に映ることは疑いない。

しかしながら、この失敗例を持ってして、コミュニケーションの「ヒューマン・イメージ」を逆に肯定的に分析することが可能である。板場良久氏（獨協大学助教授）が呈示するコミュニケーション論[15]を紹介しながら、「ヒューマン」という特性の内実を明らかにしていきたい。

板場氏は、「言語道具論」に対して、批判的な眼差しを向けるところから論を起こす。言語が道具であれば、言語の使用者は道具を操る「機能体」となり、道具を操るための機能は「技能（スキル）」と呼ばれ、人間は「目的達成」のために言語を機能させながらコミュニケーションを行う「機械的存在」と位置づけられる、と氏は想定する。その上で、「言語道具論」が一種の人間機械論であり、規範主義的であって現実描写的ではないと批判する[16]。

この項の最初に示した「言語道具論」に対する私自身の認識は、板場氏のものといくらかの温度差がある。しかし、それは程度の差の問題であり、人間コミュニケーションを「マシン・イメージ」よりも「ヒューマン・イメージ」に重きを置いて捉える方向性は一致する。「マシン」に対抗して、氏が呈示する人間コミュニケーションのイメージが「紙飛行機」である。紙飛行機の特徴を氏は次のように描写する。

> 紙飛行機は手軽に作って飛ばす日常的な遊びである。基本的な作り方を学び、不要なチラシなどがあれば、誰でも簡単に作って飛ばせる。……その構造や飛ばし方、飛ばす際の空気の状況に応じて様々

> な動きをする。……だが、目的地に正しく着陸することはまずない。紙飛行機は飛ばした後に何が起こるか正確に予測ができないことが、その面白さである。特に野外で飛ばす場合はそうである[17]。

森、クリントン両氏のやりとりは、目的達成に関しては失敗に終わったものの、その会話のプロセスは、板場氏の描写する紙飛行機のイメージに見事に符合する。簡単な挨拶においてさえも、ひとたび言葉が発せられると、それが他者からの全く予期せぬ反応を招くという現象が起こりうる。「紙飛行機」観は人間の会話につきもののコミュニケーションの「不可知性」を現実描写しているのである。森、クリントン両氏の会話は、両者にとって失敗であったかもしれない。しかし、見方を変えれば、人間コミュニケーションの本質的なありようを具現していたとみることができよう。

板場氏は、言語を道具的手段として捉えなくなった時、言語はその言語使用者の「血肉や生命の一部」[18]として認識されうると指摘する。留意すべきことであるが、"I'm Hillary's husband." というクリントン氏の素早い機転や、"Me, too."という森氏の苦し紛れの応答の中に、言語が人間の個性や固有の文化に根ざした「血肉や生命の一部」として認識されうる要素が、確かに感じとれるのである。

2）人間コミュニケーションの「本源的対話性」

「言語道具論」への問いかけを基点に、「紙飛行機」観に基づく板場氏のコミュニケーション論を紹介した。人間コミュニケーションが「マシン」の如きに容易に、また予期したようには進まないという外面上の性質を持つとしたら、その内面はどのように描写しうるのだろうか。

著名なユダヤ哲学者であるマルティン・ブーバー（Martin Buber、1878～1965）の知見をまずは紹介したい。彼は、人間コミュニケーションの内面に眼差しを向け、「対話的なもの」とは、「相互に人間が向かい合う態度」であると捉える[19]。「対話的なもの」が成り立つ最低条件を彼は次のように述べる。

> 対話によって結ばれている二人の人間は、明らかに相互に相手の方に向かい合っていることでなければならぬ、それゆえ、――どの程度、活動的であったか、どの程度活動性の意識があったかということはとにかくとして――向かい合う心がそこに立ち帰るということ

でなくてはならない[20]。

ブーバーは、対話の現象があっても対話の本質が存在しない「対話をよそおう独白」の存在を指摘する。また、真の対話は、語られたものか、沈黙のままであったかは問題でないとみる。彼は、「相手を心に想い、相手と向かい合い、対話者との間に生き生きとした相互関係をつくり上げようとする」プロセスに対話の本質を想定するのである[21]。

ブーバーの視点は、浜田寿美男氏が示す「本源的対話性」という概念に直結する。氏は、言語を「語と文法から成り立つシステム」としてみる一般的言語論の視点を捉え直し、「言葉と身体の出会い」という視点から、人間コミュニケーションのメカニズムを再考する。氏の著書である『「私」とは何か』[22]の記述に基づいて、そのエッセンスを紹介する。「本源的対話性」という概念がこの後の本稿における主題に位置づけられる。

氏は、従来の一般的言語論において決定的に欠けていた視点にまずは着眼する。それは、言葉の持つ「他者との本源的な対話性」である[23]。これは、言葉がそもそも「第一次的に」他者との関わりによって生まれてくるという性質を指す。さしずめ、前項に記した森、クリントン両氏のコミュニケーションはその好例である。両者の関わりなくして、あのような会話のやりとりが想定されることは、通常ありえない。このような「対話性」は、従来の言語論においては、二次的にしか扱われてこなかった。つまり、対話は言語獲得後の産物とみなされていたに過ぎない、と指摘する。

人間の「対話性」[24]は、身体の「個別性」と「共同性」という二重の性質から論じられる。人間は一人で生まれ、自らの身体からは決して逃れることができない「個別性」を持つ。身体の「個別性」は、人間に本源的な「自己中心性」を与える。人間は自らの身体を抜け出さない限り、どんなに想像力を高めても、世の中は今の自分に見えているようにしか見えない。

一方、人間の身体は「共同性」を合わせ持つ。人間と人間という二つの身体が出会ったとき、そこに相互作用が生じる。例えば、表情を通して人同士が分かり合うメカニズムは、個の単位を越えて存在する。その機能は、大人の微笑みに反応する赤ちゃんの時からすでに備わっている。このようにして、「共同性」は人間に本源的な「社会性」、すなわち人間

同士が互いに関わりあおうとする性質を与える。

留意すべきことは、人間が「自己中心性」を維持しながら、同時に「脱中心化」の契機を持つという存在の二重性である。自らの世界は、自らの身体に囚われながらも、その範囲を家族をはじめとする様々なレベルの共同体へと拡大していく。その拡大された世界もまた、自らの身体を支配することになる。このようにして、人間の身体は二重に囚われた構図の中を生きる。

その構図の中で要になるのが言葉である。「我が身から発しつつ、我が身を越える最大の媒体」[25]である言葉は、「本来的な表現性」を備えている。「本来的な表現性」とは、出会った相手を一人の主体として受けとめる人間の性質に依拠する。人間は、自分と他者の差異を認めた上で、相手と相互の主体的やりとり、つまり、「能動－受動」のやりとりができる。相手が発する力の向きや大きさを察知しながら、その力をやりとりするダイナミズムがそこに働く。

ここに、言語習得メカニズムの新しいモデルが提供される[26]。それは、従来のように、言語習得を「意味するもの（音声あるいは文字）」と「意味されるもの（概念あるいはその実物）」の間の記号的結合という次元にとどめるものではない。そのモデルにおいては、「自分」、「意味するもの」、「意味されるもの」の三項に加えて、「相手」の存在が求められる。「自分－相手」の対人関係、つまり「身体」のつながりがあり、そのつながり上に「意味するもの－意味されるもの」、つまり「言葉」と「意味」の記号的つながりが形成される。かくして、共同の世界を広げながら、生身の生の只中に言葉を立ち上げていく、という人間アイデンティティーの根幹にふれるメカニズムが説明される。

とりわけ、言葉発生以前の子供にとっては、「自分－相手」の対人関係が主軸となり、言葉は「事後に到達すべき結果」として捉えられる。また、すでに言葉の世界に住む大人の世界においては、コミュニケーションの主軸が「言葉」であるのか、それとも、なおも言葉の手前にある「身体」にあるのかは、そう単純には決められないと指摘する。

外面上は単なる言葉の行き来に過ぎない対話であるが、対話者の内面は、「能動－受動」の複雑なダイナミズムの渦中に置かれている。対話者は、多かれ少なかれ、「能動－受動」のダイナミズムに翻弄され続けるありようが想定される。その結果として、対話者は、相手が発する力の向きを捉えそこなったり、また、相手が受けとめることのできない力

を発したりする可能性を常に孕む。一人一人の人間が「個別性」を備えている以上、「能動」と「受動」がかみ合わない現象を避けることはできない。

この視点は、「紙飛行機」観に基づくコミュニケーション論の裏付けになる。会話が「迷走」したり、「衝突」したり、「不時着」したりする性質は、人間コミュニケーションに備わる本源的な「個別性」の表出の一部とみなしてよかろう。

その一方で、「能動－受動」のやりとりは、自分、相手の単独では完結しない、という人間コミュニケーションの本源的な「共同性」がある。ここでの単位は両者がなす「対」そのものである。人間は、お互いが、相手の発している力の向きを察知しながら、その向かう力を調整しあおうとする相互志向性を備えている。浜田氏は、この性質を「自他二重性」と表現する(27)。この概念は、根本において、ブーバーの述べる「対話的なもの」、すなわち「相互に人間が向かい合う態度」に重なり合うと考えられる。

浜田氏の知見は、人間のコミュニケーションが、その内面においても、「マシン」のイメージでは到底捉えきれない「ヒューマン」としての特性を持つことを明らかにしている。「個別性」と「共同性」を合わせもつ人間に備わる「本源的対話性」が、人間コミュニケーションに「能動－受動」のダイナミズムを与える。言葉に備わる「本来的な表現性」は、そのダイナミズムに裏打ちされて生み出されるものとみてよかろう。

3）「マシン」と「ヒューマン」のバランス感覚

ここまでに浮き彫りになったことは、人間コミュニケーションは、「マシン・イメージ」のみならず、「言語道具論」では到底捉えきれない「ヒューマン・イメージ」を持つというありようである。今日の英語教育は、「マシン」と「ヒューマン」という人間コミュニケーションの二面の特性に対してどれだけのバランス感覚が働いているだろうか。

冒頭に記したように、新指導要領が本年度より実施に移され、「実践的コミュニケーション能力」養成という視点から、「会話」の練習により多くの関心が傾けられていることは想像に難くない。また、社会全般において英会話熱が拡大する傍らで、英検、TOEIC等の資格試験が幅を利かせ、受験者数が増加の一途をたどっている(28)。多くの学習者は、それらの試験で高得点を取るために膨大な努力を払っている現状がある。

私たちは、これらの現象にどう向きあっていくべきなのか。英語教育

の第一線に立つ三人の著名な識者の見解を紹介することにより、「マシン」と「ヒューマン」のバランスについて考える手がかりをつかみたい。

東後勝明氏（早稲田大学教授）は「言語道具論」に鋭い警告を発する一人である。2002年3月に開催されたシンポジウム[29]において、今だ「労多くして功少なし」の感が強い日本の英語教育が抱える課題について活発な議論が交わされた。日本人の英語力がいかに劣っているか、日本の英語教育がいかに遅れているか、いかにして「やれる学生をやれるように伸ばしていけるか」という問題[30]に焦点が絞られていく中で、東後氏は、その議論を肯定して受けとめた上で、もう一つの視点を抱くことの重要性を訴えた。

氏は、英語教育が最終的に目ざしているものは「英語力」という技術だけなのだろうか、という疑問を発した。技術に先走り、人間としての成熟、先生と生徒の人格的ふれあいを通した内面の充実という教育の最も根幹的な部分が切り崩されることの問題性、「エデュケーション」が「トレーニング」になってしまうことの危険性を指摘した。

司会の平野次郎氏（ＮＨＫ解説委員）は、この発言を重く受けとめ、「英語は道具だから使えればいいということになると、英語の先生は一体何のために英語をきわめて英語を教えているのだろうか、という疑問に突き当たる」との思いを率直に述べ、英語教育者にはそのようなわだかまりがないのか、との質問を投げ返した。東後氏は、わだかまりがあることを認めた上で、次のようにコメントした。

> 現代は車、コンピューター、英会話の時代と言われるが、基本的には全くちがうのではないか。それら三つは確かに手段であるが、言葉について言えば、もっと深いところでは、生きるとか命とか、人格形成とか、そういうところに深く関わっている。極端に言えば、言葉を知るというだけで、仮にそれを使えなくとも、その人にとってそれは無駄ではない。それなりの価値を見出していく。その視点が大切なのではないか。その視点と、世の中のニーズに対応していくという視点は、車の両輪のような意味がある。

端的に言えば、東後氏は、「マシン・イメージ」のコミュニケーション教育を肯定した上で、それが行き過ぎることに危惧を表明し、見失われがちの傾向にある「ヒューマン・イメージ」のコミュニケーション教

育の重要性に注意を喚起している。人間が言語を学ぶことそれ自体の中に意義を見出そうとしているのである。この見解は、先述した、言葉を「血肉や生命の一部」として認識する板場氏の視点とも重なる。

上田明子氏（津田塾大学名誉教授）は、会話に重点を置くことにより、「役立つ」英語が身につく、という発想が短絡に過ぎることを述べ、今日の会話重視のあり方が、「学習過程と到達点を混同している」と指摘する[31]。

外国人と英語で意見を交換する、という目標を学習者が抱いたとする。そのこと自体は、学習意欲の向上や動機づけとして役立つことは間違いない。しかしながら、その「到達点」に達するためには、その「学習過程」において、会話を練習するだけでは足りないことは明らかであるとし、氏は、読み、書き、話し、聞くの四技能は、「役立つ」コミュニケーションのためにどれも欠くことができないと述べる。また、それに加えて、場面を把握する力や目的を達成するための方略能力、さらには、「国際人として相手に対する許容度の広さ－理解しようとする心」を養うことも欠くことができないと主張する。

上田氏の論も、コミュニケーションを「マシン」と「ヒューマン」の両方のイメージから捉えている。どちらかというと、「役立つ」や「目的達成」という言葉に象徴される「マシン・イメージ」が先立っているが、最終的には人間の心の問題を言及することを忘れていない。「到達点」という目標における行為が、「学習過程」というプロセス段階における行為とは必ずしも重ならない、という指摘は特に傾聴すべきである。

鳥飼玖美子氏（立教大学教授）は、資格試験への向きあい方を近著にて考察している[32]。資格試験は、コミュニケーションという人間同士の言語活動のありようを、試験会場という人工的な場で測定する性質のものである。それは、他者と比較することが宿命づけられ、「目安」としての機能を持つが、人間コミュニケーション能力の全貌を評価するものではない。とりわけ、資格試験には個人が自発的に発言する能力が測られないことを、根本的な疑問として指摘する[33]。

氏は、資格試験の存在意義は、自らが英語を勉強したその努力の成果を目に見える形で確認したい、という自然な要求を満たすことにあると捉え、資格試験のスコアを上げるための勉強を「本末転倒」であると述べる。言語について、また外国語を学ぶということについて、以下のよ

うにコメントする。

> 言語とは思想と表裏一体をなすものであり、文化の表象である。外国語を学ぶということは、異質なものに心を開いて受け入れるということに他ならない。……しなやかな学びの先にあるのは、自分と異なる文化と人間との対話であり、そこから生まれる新たな世界である。ひとつの外国語を学ぶことは、未知の世界に一歩近づくことであり、それが達成できた時の喜びは、相手を征服した勝利感ではなく、異質な他者と対峙しつつも、そこに交流が生まれた満足感から生じる[34]。

自分は何のために、いかなる英語を学ぶのかを考えることが第一歩である、と主張する鳥飼氏は、何よりも「ヒューマン」としての主体を持つコミュニケーターの存在を想定している。同時に、文法を軽視する風潮に真っ向から反対意見を述べる。外国語で内容のある話をする場合は、体系的な文法知識を応用することは当然であり、文章を作りだし、組みたてる力を支えるのは基本的な文法の知識であると主張する[35]。鳥飼氏は、「ヒューマン」であることを前提とした上で、「マシン」を主体的に使いこなす人間コミュニケーションを想定している。

私たちが英語教育に携わる際に大切なことは、言語、あるいはコミュニケーションを「ヒューマン・イメージ」と「マシン・イメージ」のバランスで捉える感覚であろう。バランスを保つ方法は、東後氏、上田氏、鳥飼氏のそれぞれ異なる発想法を見ても明らかなように、多種多様に存在するとみなすのがふさわしい。両者の絶対的なバランスが存在しないところに、人間コミュニケーションの真価がある。学習者一人一人が模索を繰り返し、自らに最も適したバランス感覚を身につけていく姿勢が、外国語学習の屋台骨として求められる。

4）「本来的な表現性」を生み出す授業実践

国際競争の激化が進む中で、資格試験等にみられる日本人の英語力の低さがしきりに取り沙汰されるようになった。「英語力」が資格試験の点数と同一視される風潮が強まり、東後氏が示唆するように、「ヒューマン・イメージ」の教育が、「マシン・イメージ」の教育に押され気味の傾向がある。この風潮の中で、いかにして両者のバランスを維持して

いけるか。とりわけコミュニケーションの「ヒューマン」としての特性をどうしたら教育に浸透させていけるのか。この項では、私のささやかな授業実践を紹介する。

対象の授業は、私が勤務する敬和学園大学で行った、2001年度のライティングの一授業である。この授業の実践記録については、すでに別の論考[36]において記述済みであるが、ここでは、先述の「本来的な表現性」という概念を軸にして、実践に基づく私なりの考察を展開する。

初めに指摘しておきたいことは、この授業に私がこめたメッセージを受講学生が全般的にポジティブに受けとめてくれたという事実である。受講生39名全員分の感想がその論考に掲載してある[37]。それらを分析すると、授業に対して「楽しい」、「興味深い」、「力がつく」、「役立つ」等、肯定的な表現が使われている感想は、全体の8割をはるかに越えた。一方で、「難しい」、「大変」等、苦労を示す表現を使用した学生も全体の6割近くに及んだ。

ここで留意すべきことは、その両者が対立していないという傾向である。「難しくも楽しく感じる」や「大変であるが力がつく」という内容が全体のほぼ半数を占めた。難しさ、大変さに否定的な評価を下したコメントは皆無であった。「苦あれば楽あり」とは、昔ながらの人生訓であるが、この授業ではそのありようがほぼ実現したとみてよい。

この授業で使用した教材は二種あり、一つは"Dennis the Menace"（以下、『デニス』）[38]というヒトコマ漫画であり、もう一つは"Ask Beth"（以下、『ベス』）[39]という人生相談コラムである。ともに、アメリカの新聞に今日も連載を続けている。ちなみに、『デニス』、『ベス』ともに、インターネットで閲覧が可能である[40]。

まず、『デニス』の授業について述べる。この漫画の主人公は5歳の「デニス」という名のわんぱくな少年である。デニスは、身近な人々、つまり両親、祖父、友達、幼稚園の先生、隣のおじさんおばさんらと縦横無尽のコミュニケーションを繰り広げる。バックグラウンドはアメリカの日常生活である。学生には、漫画のどこに面白さがあるかを問い、彼らは英文でその面白さの内容をまとめる。

いかに客観的に漫画の面白さを説明できるかを問うことが主旨であるが、実はそれ以前に、漫画を独力で解釈すること自体の難しさがある。内容のポイントがきちんと押さえられている答案は毎回少数である。異文化を理解する難しさは確かにある。しかしながら、5歳のデニスの口

から飛び出す英語は、文法や語彙においては決して難しくない。学生に不足しているのは、一つには、「能動」と「受動」という対話のダイナミズムの渦中に身を置いて、話者のメッセージを把握する能力であると思われる。

この授業では、必ずしも漫画の正しい解釈を至上目標とはしない。学生は、簡単な英語なのになぜ漫画の面白さが分からないのか、というもどかしさを味わうことになる。漫画をつらつらと眺めながら、「考える」ことをいやおうなしに要求される。彼らの多くは、無理やりにでもこじつけながら、どうにか自分なりの解答を作成する。結果としては珍解答のオンパレードになるのが常であるが、それはそれで一向に構わない、と私は考えている。学生に自らの頭で考えさせることにより、英文を作成させるプロセスそのものに私は価値を置いている。

学生の解答は、当然ながら一人一人の内容が異なる。漫画を正しく解釈したにせよ、それを説明する論理の運びは、個人によって異なるのが普通である。このようにして、人間コミュニケーションの「個別性」が尊重される。学生は、クラスメートの様々な思考パターンを鑑賞することに楽しみを感じうる。

この英語授業を支えているのは、『デニス』の内容の興味深さである。まず言えることは、漫画に現れるアメリカ人の生活習慣や思考様式が、アメリカ文化の生きた資料になる。子供部屋、幼稚園、教会、ショッピングモール、お医者さん等、様々な日常レベルの舞台が登場する。英語の勉強とともに異文化を知りたい、という学習者の欲求を同時に満たすことができる。

より重要な興味深さは、デニスのコミュニケーションスタイルに見出せる。デニスのコミュニケーションは紛れもなく「紙飛行機」型である。スピード違反で捕まった父親の車の中で警察官に、「同じスピードで走っていたんだから、僕にもチケットを切ってよ。」と言う。教会では、「牧師さんって先生よりいい仕事だなあ。僕の先生、一週間ずっと話しているけど、だれもお金の入ったお皿をあげないよ。」と言う。このように、大人にしてみれば、突拍子もない発想を基にデニスは言葉を発する。その「突拍子もない」ことが、この漫画の生命なのである。

デニスの言葉は、言うまでもなく決してジョークではない。5歳のデニスは、当然ながら、「個別性」、言いかえれば「自己中心性」に囚われたコミュニケーションをする。「共同性」が発展途上であるデニスの目に映る世の中は、デニスの限られた社会性に囚われた世界である。浜田

氏が指摘するように、人間は、自らの身体と、それを取り巻く世界の両方に支配を受けている。

デニスの「能動」は、デニスの周囲を取り巻く大人たちが「受動」しきれない型破りさを持つ。この意味において、『デニス』は、「コミュニケーション・ギャップ」を描いた漫画である。「紙飛行機」型会話の「本来的な表現性」が、デニスの言葉を生き生きと機能させている。その迫真味のある表現スタイルに、読者の心は惹きつけられる。

次に『ベス』の授業について述べる。この人生相談は、主として10代の思春期の子供たちの悩みに、「ベス」という専門のアドバイザーが回答するという形式である。最初に学生に提示されるのは、コラムより選り抜いた人生相談に寄せられた質問である。ベス自身の回答は、この時点で伏せられている。学生は、各々がベスになりかわったつもりで、自分なりの回答を英文で作成する。

『ベス』の質問者たちの英語は、全般的に平易で理解しやすい口語調で書かれている。語数も50~60語程度のものが多く[41]、読むことにさほどの時間を奪われない。それぞれが悩みを告白しているだけに、感情がこもり、真剣さのにじみでる英語である。回答者であるベスの英語についても、同様の性質がある。質問者の助けになるべく、かみくだいた、分かりやすい言葉を使用し、誠心誠意メッセージを発している。

人生相談の回答には、正解などというものは存在しない。学生は、各々が自分の価値観に照らしながら悩みに対するアドバイスを必死に考える。回答一つ一つの発想や英語表現は多種多様で、回答者の個性、人間性が映し出される点が興味深い。

『ベス』もまた、アメリカ人の子供たちが現実に抱く悩みを知れる点で格好の異文化理解教材である。恋愛、身体、人間関係の悩みは、しばしば日本人とアメリカ人の共通性を認識させてくれる。一方、両親の離婚、麻薬、家庭内暴力、銃等に関する悩みは、日本社会とアメリカ社会の違いをまざまざと教えてくれる。この授業では、学生にとって与しやすいと思われる前者のタイプの質問を選ぶようにしている。

『ベス』の授業では、人間コミュニケーションの「共同性」に本質を据える点において、『デニス』の授業とは趣をやや異にする。様々な悩みの内容は、例えば、親の小言がうるさすぎる、転校したら人気がなくなった、タバコが止められない、好きな人にどう気持ちを打ち明けるか等、大人から見ればたわいないとも思われる相談が多数ある。大切なの

は、それらが「たわいない」からこそ、学生にとっても身近な問題である、または、であった、というからくりである。学生は、身に覚えがある問題を突きつけられるがゆえに、質問者に対して共感の思いを抱くことができる。

質問者の「能動」の働きかけを、回答者である学生は「受動」する。学生にとって、その質問者はいつの時代のどこの誰であるかは個人的に特定はできない。しかしながら、その質問者が持つ悩みの内容を知り、人間としての「共同性」を察知した瞬間、時間と空間の壁はかなり取り払われることになる。質問者の「能動」と回答者の「受動」が一体化し、それが回答者の「能動」を導く。そのプロセスにおいて、浜田氏のいう「自他二重性」の性質を持つコミュニケーションが展開されうる。言葉と身体はかようにして結合する。

学生が取り組むのは、共感を軸としたコミュニケーションである。ブーバーが述べたように、「相互に人間が向かい合う態度」こそが、対話の本質である。「相手を心に想い、相手と向かい合い、対話者との間に生き生きとした相互関係を作り上げようとする」あり方は、この授業空間の中で物理的には実現することはできない。しかしながら、人間に備わる「他者との本源的な共同性」を軸にすることにより、「本来的な表現性」を引き出していくことは可能である。

ここまで、『デニス』と『ベス』の両者ともに、コミュニケーションの「ヒューマン」としての特性をクローズアップした授業内容を紹介してきた。ここで付言しておきたいことは、この授業がコミュニケーションの「マシン」としての特性への配慮を怠っているわけではないというありようである。私は、先に紹介した鳥飼氏の文法に対する見解に全面的に賛成する。つまり、体系的な文法知識を構築することの重要性はいくら強調してもしすぎることはないと考える。

両者の授業スタイルは、学生により板書された答案の数々を順番に私が添削する方式を取る[42]。その際に強調することの一つが、文法の正確さである。私は答案の一字一句に目を配り、文法の不正確な部分に対しては丁寧な解説を加えることにしている。文法ミスを否定的に捉えるという意図はない。言葉を使う際はミスがつきものであるという前提の上で、ミスを積極的に利用しながら文法知識を定着させていくという狙いがある。

文法という「マシン」の精度を高くすることにより、自分のメッセー

ジがより効果的に伝わりうることは確かである。また、体裁上も、ミスが少ないに越したことはない。ただし、精度の高さにこだわる余り、完全主義に陥ることには注意を向けなくてはならない。

そのための方策として、私がこの授業で重視するもう一つの観点は、自分のメッセージをできる限り平易な英語で組みたてる、という英文構成能力である。文を「組みたてる」というのは、文を「暗記する」ということではない。表現したいことを簡潔な英語で伝達するためには、柔軟な発想力に加えて、日本語と英語の構造の差異に関する深い理解が必要となる。「体系的な文法知識」はその次元において「道具」として十全に生かされうるのである。

板場氏が呈示する「紙飛行機」観に基づくコミュニケーションの特性、さらに浜田氏が呈示する「本源的対話性」という人間の性質を生かすことにより、「言語道具論」に必ずしも縛られない生き生きとした言語教育がかようにして展開する。

先に紹介したように、『デニス』と『ベス』の授業は、多くの学生から肯定的な評価を得た。学生の感想に示された「苦あれば楽あり」の「苦」とは、端的に言って、「覚える」という行為ではなく、「考える」という行為を指す。その「考える」という文脈に工夫を凝らすことにより、学習者はコミュニケーションに充実感を味わう。その工夫とは、人間に備わる「本来的な表現性」を教える側がどれだけ生かしうるかにかかっている。またその充実感とは、その「本来的な表現性」を教わる側がどれだけ発揮しうるかにかかっている。

5）結びに代えて

本稿に取り上げた森、クリントン両氏のエピソードは、様々な点で示唆に富む。森氏がミスコミュニケーションを生み出すに至った一つの要因は、「マシン・イメージ」によるコミュニケーション教育の偏重にある。「挨拶」という言葉の「使用場面」において、"How are you?"という言葉を発すれば、"I'm fine."という返答が来て、それに対しては、"Me, too."で受け答える、という一種の機械的なモデルパターンがあらかじめ用意されている。学習者は、それらの常套句、あるいは定型文をともかくは覚えて、実際の会話に使用しようとする。

主要な問題は、「マシン・イメージ」の教育が、往々にして言葉のミスやパターンの変則には不寛容であるという傾向に見出せる。英語の学力

試験問題に顕著にみられるように、型の定まった文を「正確」に表出すること自体が至上目的になる傾向がそこにある。

定型文や常套句には「個別性」がない。「個別性」を発する契機がないと、必然的に、対話者との「共同性」が成立する契機も失われる。その結果、学習者は、自らが発する言葉の外面上の「正確」さに心が奪われ、対話者との「能動－受動」の微妙な内面上の揺らぎ、つまり「ヒューマン・イメージ」を少なからず消滅させることになる。そこでは、本来の「対話」とはかけ離れた単なる言葉の行き来、すなわち「対話をよそおう独白」が展開される。

すでに述べたように、私は、「マシン・イメージ」の教育を否定し、「ヒューマン・イメージ」の教育を無条件に礼賛しているのではない。人間コミュニケーションには、両者の特性がともに備わっている。両者をいかにして連携させるかがポイントである。その打開策の一案として、私は、「ヒューマン・イメージ」の対話を主軸に位置づけ、同時に「マシン・イメージ」としての文法の精度と機能性を高める訓練をするスタイルの実践を紹介した。

このスタイルはあくまでも「一案」としての紹介である。ここに紹介した「マシン」と「ヒューマン」のバランスは、私が私なりの実践を通して見出した一つのバランスに過ぎない。繰り返すが、そのバランスにおいて絶対という基準はない。

留意すべきは人間コミュニケーションに備わる逆説的な性質である。ミスの回避を最優先する「マシン」教育の偏重が、ミスを前提とする人間コミュニケーションの「ヒューマン」性を退けてしまう。常套句や定型文をひたすら「覚える」訓練を施す言語教育が跋扈した時、人間は逆にコミュニケーション能力を失う結果になりかねない。

人間コミュニケーションの「紙飛行機」性、すなわち、会話は、時には「迷走」し、「衝突」し、「不時着」するという「ヒューマン・イメージ」を当然の現象として受けとめる姿勢がない限り、対話者は、「能動－受動」のダイナミズムに溢れる真の「対話」を実現することはできない。

冒頭に紹介したように、文部科学省は、中学卒業段階の英語力の達成目標を「挨拶や応対等の平易な会話ができる」と記した。文科省が、その表現において想定する「挨拶」や「応対」の事象とはどのようなものなのかは明らかでない。もしそれが「マシン・イメージ」でしか捉えられないコミュニケーション活動であるならば、十分な再考が求められる。忘れてはならないことは、「挨拶や応対等の平易な会話」でさえも、容

易に進むとは限らないという「ヒューマン・イメージ」である。言葉のやりとりの前に、「相互に人間が向かい合う態度」がなければなるまい。

ブーバーは、「対話の生活とは、人々と多くの関わりを持つことではなく、関わるべき人々と真の関係にはいることにある」と述べる[43]。「相互に人間が向かい合う態度」の養成は、人間関係の希薄化が指摘される現代社会に生きる私たち全体に求められる切実なニードである。ブーバーは哲学者の立場から、「対話」と「共同体」を次のように関係づける。

> 真の宗教の対話の時代は始まっている。一相手を現実に見つめることもせず、呼びかけもしないあの見せかけの対話ではなくて、確信から確信への真の対話、胸襟を開いた人格から人格への真の対話である。真の共同体はこのようにしてようやく現れる[44]。

やや大仰にも聞こえるが、英語教育、コミュニケーション教育も、この文脈の中でこそ生き生きとした生命を保ちうる。「対話をよそおう独白」に従事する限り、どんなに「会話」に励んでも、真の「対話」には到達し得ない。「我が身から発しつつ、わが身を越える最大の媒体」として言葉を機能させること、そのための工夫と努力こそが今日の言語教育全般に求められる最大の課題である。

註

(1) 1998年度文部省（当時）により告示され、小・中学校においては2002年度より導入された。高校においては2003年度より導入予定である。文部調査官・新里眞男氏（告示当時）は、新指導要領の外国語科における改訂の特徴として、次の5点を記している。[①外国語科を必修とする。中学校では英語履修を原則とする。②「実践的コミュニケーション能力」の育成を目指す。③中学校において「聞くこと」及び「話すこと」を重視する。④高等学校において、四つの領域の有機的関連を図った「コミュニケーション活動」の指導を行う。また、「コミュニケーション活動」の基本条件を示す。⑤「言語活動の取扱い」で「指導上の配慮事項」と「言語の使用場面と働き」を明示する（強調は引用者）。]（新里眞男「新学習指導要領のねらい」『英語教育』大修館書店、1999年6月号、8頁）。

(2) 田島久士「英語教育日誌（2001年4月～2002年3月）」『英語教育』大修館書店、2002年10月増刊号、65頁。

(3) 『英語教育』2002年11月号（大修館書店、34－35頁）に「『英語が使える日本人』の育成のための戦略構想－英語力・国語力増進プラン－」の全文が掲載されている。

(4) 2002年6月7日、NHK教育テレビにて放送の「日本の英語教育を考える（金曜フォーラム）」（財団法人異文化コミュニケーション財団主催、2002年3月3日、新宿NSビル）においてこのデータが紹介された。
(5)「いろんな人が教えてくれる、TVの人の英語本は役立つの？」『アエラ』朝日新聞社、2002年9月2日号、43頁。
(6) 拙稿「コミュニケーション論再考－人間の顔をしたコミュニケーション教育に向けて－」『敬和学園大学研究紀要』第9号、2000年。
(7) 慶應義塾大学教授・田中茂範、深谷昌弘両氏の「コトバの意味づけ論」、南山短期大学教授・近江誠氏の「言語パロール説」を指している。
(8) 拙稿「コミュニケーション論再考Ⅱ－G・H・ミードの「創発的内省性」を基軸として－」『敬和学園大学研究紀要』第10号、2001年。
(9) 拙稿「コミュニケーション論再考Ⅲ－「時事英語」4年間の授業実践を踏まえて－」『敬和学園大学研究紀要』第11号、2002年。
(10) 拙稿、2000年、189－190頁参照。「コードモデル」の説明については、田中茂範「日常言語における意味」関口一郎編『現代コミュニケーション1』大修館書店、1999年、171－172頁参照。
(11) 外務省筋はそのようなやりとりがあった事実を否定している（「森首相、クリントン大統領に「フー・アー・ユー」失言の真偽」『週刊朝日』2000年8月11日号、141頁）。
(12) 2000年7月14日付『株式新聞』のコラム、その他複数の大衆雑誌により紹介された（『週刊朝日』前掲、141頁）。
(13) 国弘正雄「英語教師のための英語の話し方」、英語授業研究学会第12回全国大会、2000年8月18日、筑波大学付属駒場中・高等学校。村松増美「村松増美先生との英語学習会」2000年8月26日、新潟市万代市民会館、Joy of English あめり館主催、新潟県国際交流協会後援。
(14) 国弘氏の解釈によれば、クリントン氏の発言は、故ケネディ大統領がある場面で放った有名な言葉（"I am Jacqueline's husband."）にちなんだものであるという。
(15) 板場良久「言語運用論」石井敏他編『異文化コミュニケーションの理論－新しいパラダイムを求めて』有斐閣、2001年、189－200頁。
(16) 板場、前掲書、190－193頁。
(17) 板場、前掲書、196頁。
(18) 板場、前掲書、198頁。
(19) マルティン・ブーバー「対話」『我と汝・対話』（植田重雄訳）岩波書店、1979年、184頁。
(20) ブーバー、前掲書、184頁。
(21) ブーバー、前掲書、204頁。
(22) 浜田寿美男『「私」とは何か－ことばと身体の出会い』講談社、1999年。
(23) 浜田、前掲書、10－11頁。
(24) 浜田、前掲書、93－135頁（「身体のもつ心的構図」）参照。
(25) 浜田、前掲書、10頁。
(26) 浜田、前掲書、177－190頁（「ことばの世界の成り立ちと「私」の世界」）参照。
(27) 浜田、前掲書、206頁。

(28) 例えば、TOEICの受験者数は、1997年度が71万人、1999年度が87万人、2001年度は128万人と急増している。この数字は、個人で受験する「公開テスト」の他、企業・学校などの団体で実施する「団体特別受験制度」も含む（『週刊ダイヤモンド別冊』2002年11月号、ダイヤモンド社、68頁)。

(29)「日本の英語教育を考える（金曜フォーラム)」NHK教育テレビ、前掲。

(30) 前東京外国語大学長・中嶋嶺雄氏らがこれらの問題を指摘した。

(31) 上田明子「オーラルコミュニケーションと大学英語教育」『大学時報』財団法人日本私立大学連盟、2000年3月号、66－71頁。

(32) 鳥飼玖美子『TOEFL・TOEICと日本人の英語力－資格主義から実力主義へ』講談社、2002年。

(33) 鳥飼、前掲書、79－82頁。

(34) 鳥飼、前掲書、156頁。

(35) 鳥飼、前掲書、84頁。

(36) 拙稿「思考に重きを置くライティング授業」敬和学園大学英語科教育法カリキュラム開発研究会編『教職課程における英語の実践的指導力の養成』（教職課程における教育内容・方法の開発研究事業／平成12年度・13年度文部科学省委嘱事業）2002年、128－136頁。

(37) 拙稿「思考に重きを置くライティング授業」、前掲書、131－133頁。

(38) "Dennis the Menace"はHank Ketchamにより、1950年にアメリカの新聞に掲載が開始され、今日、48カ国・19言語にて、1000紙以上の新聞に連載が続いている。Ketchamは、1994年、彼のアシスタントであった２名に作品の制作を引き継ぎ、2001年に81歳で死去するまで、監修として作品を見守り続けた(http://www.kingfeatures.com/comics/dennis/)。

(39) "Ask Beth"は、Elizabeth Winshipにより、1963年にアメリカのBoston Globe紙に連載が開始された。ピーク時には新聞掲載が70紙に及んだ。氏は、1998年、77歳で引退を表明し、"Ask Beth"は、氏の娘であるMargaret Winship (Peg Winship)に引き継がれ、今日も連載が続いている（"Daughter Peg Succeeds Beth Winship in Writing Advice Column," The Boston Globe, October 2, 1998.)。

(40) "Dennis the Menace" は、http://www.kingfeatures.com/comics/dennis/にて、"Ask Beth"は、http://www.tmsfeatures.com/productlist.htmにて、閲覧が可能である。

(41) Beth Winship からPeg Winshipに引き継がれてから、一部体裁が変わり、質問文と回答文ともに語数が大幅に増加した。ここでの使用教材はBeth Winshipによるものである

(42) 学生は五つの文で答案を作成することを原則としている。一人でも多くの答案を授業で効率よく取り上げるためという理由の他、伝達したいメッセージを簡潔にまとめる訓練を施すという目的がある。答案例は、拙稿「思考に重きを置くライティング授業」、前掲書、135－136頁参照。

(43) ブーバー、前掲書、206頁。

(44) ブーバー、前掲書、183頁。